



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 上田秋成と蒹葭堂  |
| Author(s)    | 飯倉, 洋一  |
| Citation     | 蒹葭堂だより. 2008, 8, p. 1-2   |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/50071">https://hdl.handle.net/11094/50071</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 上田秋成と兼葭堂

飯倉 洋 一



編集・発行

木村兼葭堂顕彰会

平成20年11月28日

「秋成と兼葭堂の交友は三十年にわたる。とくに「茶飲み友達」として許しあっていたことは有名である（水田紀久『水の中央にあり 木村兼葭堂研究』岩波書店、二〇〇二年）が、今回は和学者としての交流を示す二つの消息文について述べる。いずれも文化五年刊行の秋成消息文集『文反古』上に収められているものである。

ひとつは安永四年八月と推定される和学者加藤字万伎宛消息である。大番与力の字万伎はこの時、大阪城番勤務。その役目を終えて江戸に帰ろうという直前に、送別の船遊びをするこゝになり、秋成が師の字万伎に日程の都合を尋ねる。

（前略）一日の御暇うけ給わらばや。江に棹さゝせて遊ばせ奉らん。いさりする者もつかうまつらせて、いさゝけなりともとらせてみせたいまつるべし。細合方明・木村孔恭等、舳艫に参るべく、桂常政、御あつらへの

絵筆げて是もと申す。ひと／＼と／＼もに、猶御名残の御物がたり承るべく、船は北の岸に、朝とくよりよせさせ侍るべく、ねがふは某日はいつと承らばや。けふならずとも聞えさせ給へ。

参加者は細合方明（半斎）、木村孔恭（兼葭堂）そして桂常政（『雨月物語』の挿絵を書いたとされる桂眉仙）等である。常政は字万伎注文の画を持ってくるという。『文反古』の冒頭、七通ほどある字万伎関係の一連の消息のうちの一通である。兼葭堂と字万伎との関係は、明和九年、字万伎が『押照浪速なる兼葭堂のこゝと葉』を撰んで以来である。これだけのメンバーが字万伎送別のため一堂に会したかと思うと感慨深い。

もう一通は、兼葭堂宛秋成消息で、『文反古』上巻の巻軸に位置するもの。上巻は、字万伎の他、小沢蘆庵・正親町三条公則・瑚璉尼・十時梅厓など、秋成にとって大切だった人を

追慕する文集という側面をもっている。巻頭に字万伎関係の消息七通が並ぶのは、亡き恩師を偲ぶ秋成の思いが明白に表れているといえるが、巻軸に兼葭堂を配したのは、秋成にとって兼葭堂が大切な友人であったことを意味しているだろう。手紙の前書によれば、浪速の友である兼葭堂が、源順の和名抄の十巻である本を手に入れて、今広く流通している二十巻本との違いを考えるよう依頼してきた。秋成はそのころ病気のため田舎（淡路庄）に引きこもっていたので、暇があるのにまかせて安請け合いをしてしまったが、一年余り怠っていたところ、兼葭堂がはやく返却してほしいと言いいよこしてくるので、一所懸命日数を重ねて校異作業をした上でこの十巻本を返したという。

手紙本文の書き出しは以下のようである。

年もやう／＼暮ぬめり。家こぞりてつゝみなく、春をむかへたまはんこと、あかぬためしにこ

とほぎ申す。わづらひの神は、賑はしきあたりは窺はぬものか。『和名抄』の事打もおかねど、病のひま／＼にて、月をわたりぬる事、なめしわざにおぼすらん。今はよろづをうちやめてつとめてん。今しばしも。「年の内に」とおぼし立ぬ。

暮のあいさつとともに、遅延したこゝへの丁寧な詫言が記されている。このあとは十巻本について詳細に考証している。いま秋成の結論だけ述べれば、十巻本が早く成立し、二十巻本は後人が増補したものだろうが、しかし十巻本もオリジナルとはいえない、というものである。宣長あたりがこの書を古代探求に必携のものとしていたこと（『玉勝間』）を受けてであろうか、

古言をもて、古を探る人の、此書を必便として、もはら物云も、猶尽さぬか。（中略）『和名抄』のたぐひは、中古に立ていにしへを伝ふとおもへば、又中古の誤りを後にわたす梯ともなりて、

ひたすらにたのむべからぬこと、古書をみるにこゝろえらるゝなり。

と、そこに全幅の信頼を置く危険を指摘しているのは、秋成特有の古典籍観による。この消息の年次推定、高田衛『上田秋成年譜考説』（明善堂書店、一九六四年）では寛政元年としている。秋成の病気による淡路庄退隠は天明七年のことであり、一年余り怠っていたというから、天明八年か寛政元年を当てるのが妥当だろう。天明六・七年は本居宣長と論争をしていたところでもある。右の古典籍観の言表のうちには宣長の国学の方法への批判も感じられる。ちなみに葉葭堂も天明七年春には、伊勢旅行で宣長を訪問している。

さて面白いのは、秋成が葉葭堂に出した原簡に近いと思われる『文反古稿』（天理大学附属天理図書館蔵）の当該部分には、先の冒頭部分に続いて次のような文章があるということである。

此頃の御便にせめ聞えらるゝかと見れば、あらでたゞとく返すべくうけ給はるこそ、思ふにたがひぬれ。此ふみおのれかり求しにあらす。そなたの乞給てこゝにはもたせこされしにあらすや。

（後略）

「最近あなたのお便りにて、はやくしてくださいとおっしゃるのかと思っていたら、そうではなくて、ただ早く返せとばかりおっしゃるのは、意外でした。この本は私の方からお願いして借りたわけではない。あなた

の方がお願いするからとここに持たせてきたのではないですか。…」秋成の厭味はこのあたも続くが、これも葉葭堂と気を許した仲なればこそその悪口であろう。とはいえ刊行の

際にはさすがに省いたのは、友人同士その呼吸がなかなか一般の読者にはわかりにくく、誤解を招きかねないからであろう。

（大阪大学大学院教授）